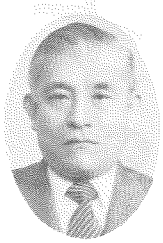
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	イラク印象記
Author(s)	橋本, 道夫
Citation	makoto. 1979, 27, p. 2-4
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86122
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka



イラク印象記

筑波大学教授
橋本道夫

三月初旬より三週間にわたってイラク政府の要求による国際協力事業団の事業として、同国の環境計画立案に参加する機会を得た。イラクと言うとどこにある国か考える人が多いかもしれないが、バクダットという首都の名前をきくと誰でもアラビアンナイトの舞台だと気付かれる。

世界の文明はチグリス・ユーフラテス河の流域から始まったということを私達は世界史の中で学んだ。メソポタミヤ文化の名は義務教育の中で誰もが一度は耳にする。イラクはこのチグリス・ユーフラテス河（二本の大河で海に近くなってからシャット・アルーアラブという一本の河になってアラブ湾に流入している。）の流域を国土としている人口一千二百万人の共和国である。

イラクは今シリヤやリビヤと共にアラブ連合の主導的な左翼勢力として今回のエジプトとイスラエルの条約に強く反対して、エジプトをアラブ連合から追出した国である。外交的には非同盟中立の立場をとり、ソ連に近く、アメリカとは国交を断交しており、以前に日本でハイジャックを国内にかばって、訓練をしているのではないかというような情報が流れたこともある国である。千九百五十八年に左翼革命によって共和国となり、親ソ政権が誕生したが、千九百六十八年に再びクーデターによってバスク党が政権をにぎり現在の共和国政府となっている。この政権はアラブの統一と、解放と、社会主義の三つをスローガンとしている政権で、ユーゴーのチトー大統領と同じように、ソ連を中心とした国際的な共産主義グループとは一線を画し、現在もソ連よりはルーマニヤやユーゴーと仲が良い。千九百五十八年の革命政権が国際共産主義の流れを汲んでいたものを、アラブ社会主義、非同盟中立という新しい路線を主張して、クーデターにより現在の政権の座についている。私は歴史で習ったメソポタミヤ地方の古代文化と、アラビアンナイトのバグダッドは確かにかさなって来るが、どうもアラブグループの極左の国といわれるイラクと、この歴史やお伽話しがうまくかさなり合わなくて一体どんな国だろうと思って行ってみた。ところが国の中に入ってみると確かに社会主義国であるが、あまりに日本で聞かされていたアラブの極左と革命という教条的なイデオローギ的な硬さとは全く違ったフレキシブルな、歴史と文化と人間味の豊かな国であることに一驚した。例えばアメリカと断交しているというのに二千人余の留学生がアメリカに行っており、リーダーの多くが西欧の教育をうけ、夏休みにはイギリスやオランダやスカンジナビヤにも自由に旅行している。国営イラク航空はアメリカのボーイングの七二七、七三七やジャンボを使用しており、私の泊ったホテルの広告にはアメリカ的豪華さという広告までつけてカードを印刷していた。街を走る自動車はまるで東西の自動車メーカーの展覧会のように米ソ独仏日伊英とあらゆる国のものが走っており、いろいろな場所で流れてくる音楽はアラブをはじめ、アメリカ、フランス、日本（橋幸夫の歌のメロディーまで流れている！）イギリス、ソ連、ラテン等のものを広く自由に流している。免税店では西欧のものがはんらんしていた。特に日本のトヨタの氾濫は驚くべきもので、その他ダットサン、日野、三菱、ダイハツの自動車が走っており、役所の局長の公用車は例外なくトヨタのスーパーサルーンの新型というのには恐れ入った。又回教の国だから戒律がきびしいと思いこんで始めは恐る恐るみていたが、確かにラジオでは一日五回位いコーランが流れてくるし、立派なモスクがあちこちにあり、金曜日は休日でモスクに多くの信者が集っている。食事に豚肉は一切出ないが、アルコール類はかなり自由で国営ビール工場があって昼食から飲めるし、又強い地酒もあるという。役所の人に招かれて食事をするとジョニ黒が必ず出されてくる。一方バクダッドの市内や周辺の住宅はすばらしい都市計画のもとに日本で言えば最小のものでも四千万円以上は間違いなくするような庭付きの一軒建の住居が大勢を占めており、一部に古い家や土造りの家が残っているが新しくつくられる住居は日本では私達には高嶺の花のような豪邸にあたるものばかりで、ごく一部に三階建ての鉄骨の入った集団住宅がぽつぽつ出来ているが、その世帯当り床面積は最小で百十～百二十平方米である。住居と都市計画と道路計画は古い町の一部を除くと全くすばらしいものをつくりつつあることに大きな驚きと感銘を受けた。

私はこんなすごい家にどんな人が住んでいるのかに興味をもってあらゆるチャンスに聞いたり観察したりしたが、全く普通の人々が素朴なみなりと、中には羊や山羊などを飼いながら住でいるのに驚いた。街や公園でながめていると確かに人種構造が多彩であり、又身なりや労働をみているとおせじにも社会階層

はないとは言えないが、二十年前のパキスタンでみた植民地の痕跡と、著しい貧富の差と、何ともいえない無気力さや多くの乞食とは全然違った新しい若い国民が生き生きとくったくなく生活を楽しんでいるように受けとれた。

しかし一方社会主義と革命の国だけあってさまざまな制約のあることもこれも又事実である。第一に感じたのは情報統制である。高度の中央主権体制をとっており、役所の中で統計資料がきわめて乏しく、又公表されるデーターは非常に限られており、公表データー以外には全く近よることが出来ない。私達は政府機関の係長、課長補佐、課長、部長、局長に相当する人々の中にまざり込んで仕事をしたわけであるが、局長ランクは別としてその以下の責任の掌にある人々ですら詳細な統計データーを持ち合せていないのは驚くばかりであり、それは計画省の統計局が集めて整理をしているので我々にはわからないという答があまりに多いのには閉口した。これは何もその担当者の程度が低いということではない。担当の責任者として我々が接した人々は若いフレッシュマンからトップの人にいたるまで確かに教育水準と専門職業人、技術者として水準は実に高くしっかりしている。貧弱なビルの中にも小さい図書館があってイギリス、アメリカ、国連関係の資料はよくとりそろえて読んでいる。実務知識水準も大へんしっかりしており、下手なことは言えないと感じた。ただ悲しいことに国全体としては七〇年代初めのユネスコのデーターでは文盲率が七〇％であり、今やっと義務教育制をはじめ、又文盲追放のための義務制の成人学校を昼間も夜間も各所で活潑にやっており最も最近の文盲率は四〇％ということになっている。日本大使館で伊達大使とお話しをしたときに「一握りのエリート」ということを言っておられたが確かにそのような面もあるが、どうもかなり大きな進歩と変化が進行しつつあるのではないかと感じた。

この国はアラブ産油国の一つでイギリスににぎられていた石油を国営化し、更に千九百七十三年のＯＰＥＣのオイルショック以来原油が四倍に値上げされたので大巾な黒字国となっている。国の収入の五十一％は原油輸出収入であり、今この原油収入の割合を四十七％にさげようとして社会経済発展計画を進めている所である。従って彼らは金はあるから金で援助してくれというようなことは一切言わない。技術移転をしてほしいということを強調している。乞食は禁止されており、私は三週間で二人だけ出会ったのみである。仕事はあるので働けば食べられてこまらないので乞食は強く禁止しているとのことであった。あらゆる場面を通じてたかり根性や物欲しがりといったようなそぶりは全く見られない。これは東南アジア諸国に対して技術援助に行った場合と全く根本的に違う点であるということを同行した公害研の内藤教授が何度も言っていた。四十三万平方粁という国土（日本は三十七万平方粁）に人口僅か千二百万（日本は一億一千五百万）で、石油資源と水資源に恵まれ、七千年の世界最古の文化の背景と、千三百年余の回教の伝統と、三十年余の独立の歴史、二十年間に二回の社会主義革命の歴史がこの国の古さと新しさと、活力と自信を創りつつあるように思えた。古来メソポタミヤは歴史の興亡盛衰の中で東西南北の民族と、通商と、文化の交流点となった所である。西欧文化の源流も実は強くこのメソポタミヤ文化の流れを受けている。これは私の全く認識不足と教養の欠如に帰因していたものであるが旧約聖書、新約聖書、コーランは全く共通の一つの流れのものであり、回教はユダヤ教やキリスト教を超えて更に原流のアッラーの神にもどれということをいっており、何も旧約や新約を否定したものではなく、ただ社会体制としてのユダヤ教、キリスト教の宗教、政治、経済の体制を否定しているのみであることを三週間の間にコーランを読んで始めて知らされたわけである。

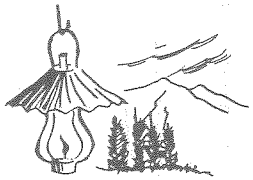
日本におけるイラクに対する認識は、アラビアンナイトとバグダット、アラブの極左と親ソ国という極めて均衡を欠いた、偏向した目で見ている、又は聞かされていることをつくづく感じた。

情報統制の今一つとして写真撮影、タイプライター・コピー、地図、ラジオのＦＭを全くあきれるばかりのきびしい制約を加えていることである。

写真機を持っている人は殆んどみられない。軍事施設や空港での撮影禁止は当然としても橋や役所、大統領宮殿なども一般には禁止されている。英文タイプの持込みは事実上不可能であり、英文タイプを利用することも制約されている。私はタイプを使って考えをまとめるのでこの点は非常に苦労した。しかし特別の努力によって最終の四日間やっと使うことが出来たが、これも番人付きである。コピーの機具は古風なものが局長室の局長の座右におかれている。地図は観光用の地図以外には見当らない。都市計画などの地図は勿論あるがコピーの入手も出来ない。地図を示して説明をすることには殆んどなれていないらしいのには驚かされた。ラジオはＡＭとＳＷはＯＫだがＦＭは禁止である。これは軍隊や警察の交信がきけるからということである。新聞はアラビヤ文字が読めないので私にはわからないが、英字新聞も一部発刊されている。これには宣伝臭もあるが各国の記事をかなり事実として冷静にのせている所もある。特に感じたのはイラン情勢については全く中立といった感じである。ソ連の宣伝は全くみられない。ブレジネフがシリヤに行ったと数行事実を報道しているのみである。

九十九％強の土地を国有化し

土地利用、立地、都市計画、建設及建築、投資、生産、通商、経済計画をすべて中央で統制しているので環境計画や行政としてまことに強力な徹底したことが行われる反面情報統制などの硬苦しさはさけられない。国土と石油と水には恵まれているが夏季には五十六度を超える想像も出来ない酷暑や、荒漠たる砂漠、塩水化などのきびしい自然は日本と全く違っていた。新しい汚染や環境破壊は全くきびしく押えられているが、既存の公害はたれながしでありそれに今とり組もうとしている。マラリヤや住血吸虫などの地方病はこの十年間に驚くばかり改善されていた。イラクは日本に対して大きな関心を持っており、私等の接した人々は上から下まで非常に親日的なのにはおどろかされた。

古くて若いこの国が今環境計画をスタートしようとして体制の全く異なる日本に指導を求めたことに大きな責任を感じた。

（前　環境庁大気保全局長）